

一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字で書きなさい。

- ① 友だちをベンゴする。 ② 選挙のトウヒョウをする。 ③ 長年のシユクテキをたおす。
④ チョウジョウに登る。 ⑤ シンソウを明らかにする。

二 次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで書きなさい。

- ① 俵を積み上げる。 ② 年賀状を刷る。 ③ 白波を立てて進む。
④ すがすがしい心地。 ⑤ はるか昔の合戦場。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

エジプトの地に豊かな恩恵をもたらしたのはナイルであり、とりわけこの大河が毎年起こす氾濫(はんらん)②(増水現象)①でした。ナイルの水源地である熱帯アフリカは、毎年六～九月が雨季にあたり、多量の雨が降るためにナイルの水量が増加します。③白ナイルは流域に高低差が乏しく、増水も多くが湿地帯で吸収されるため、流れには大きな変化はありませんが、エチオピア高原からの二つの支流は、この時期に勢いを増します。これは流域の高低差に加え、エチオピア高原の雪解けが重なるためで、特に青ナイルの水量が急増、大量の泥や水草の切れ端をまきこんだ濁流(だくりゅう)が本流の白ナイルに流れ込みます。このためナイルの水位は上流から下流へと高まり、六月末にはアスワンで水位の④上昇が始まるのです。

現在、ナイルにはいくつかの水門やダムがあつて、川の流れはコントロールされており、特に最も大規模なアスワン・ハイダムが完成してからは、エジプトはこうした増水現象の影響をほとんど受けなくなりました。しかしかつては、エジプトの平野は毎年、水量を増したナイルに呑み込まれ、長期にわたって水没していたのです。とりわけ増水が最高潮に達する九～十月には、水の届かない砂漠を別にすると、小高く作られた堤防や、村、町などが水面上に島のように浮かんで見えるだけでした。

このように国土が水没してしまうというのは、普通に考えれば大規模な水害以外のなものでもないでしょう。ところがナイルの氾濫は、災害だったのではなく、I 自然の恵みでした。

エジプトや西アジアのような乾燥地域では、地表が乾燥すると地下水が吸い上げられて蒸発し、地下水に含まれる塩分が結晶となつて地上に残る現象(塩化、塩害)が起きます。この塩分は農作物の生育には有害で、塩が吹き出た土地は農耕に使えなくなりますから、絶えず農地に水を引かなくてはなりません。エジプトでも六月末になると暑さのために大地は乾燥し、ナイル流域の土壌にはかなりの塩分が含まれるようになります。しかしそこで、ナイルが氾濫を起し、塩分を溶かしだして地中海まで洗い流すだけでなく、充分な水と

〔注〕 1 白ナイル——ナイル川の本流のこと。青ナイルは、その支流。

問三 — 線部②「この大河が毎年起こす氾濫」とありますが、ナイルはどのようにして氾濫を起こすのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ナイルの水源地である熱帯アフリカで雨季に大量の雨が降ることにより、高低差の激しい白ナイルでは水位が上昇するから。
イ 雪解けの水と雨季に降る多量の雨水が高低の差のある支流から流れ込むことによって、ナイルの本流の水かさが増すため。
ウ 春になりエチオピア高原の雪が一気に解け、青ナイルの水量が急増し、大量の泥と水草と共に白ナイルに注ぎ込むため。
エ ナイルはダムによって、流れがコントロールされており、現在ではダムの水の放流によって氾濫が作り出されているから。
オ 雨季による水量の増加とエチオピア高原の雪解けによって、アスワン・ハイダムの水位が上がり、白ナイルが濁流となるため。

問四 — 線部③「へとりわけ」は文中のどこにかかりますか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 増水が イ 九〜一〇月には ウ 別にすると エ 堤防や、村、町などが
オ 島のように カ 見えるだけでした

問五 — I に当てはまる言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ほぼ イ あるいは ウ ほとんど エ 確かに オ むしろ

問六 — 線部④「水害はまれでした」とありますが、ここでいう「水害」とはどのようなものを指しているのですか。次の中から最も適当なものをを選び、記号で答えなさい。

ア 農地まで水に浸かってしまう状態
イ ダムが決壊してしまう状態
ウ 住んでいる家まで水に浸かってしまう状態
エ 作物まで水に浸かってしまう状態
オ 地表に塩分が残ってしまう状態

問七 — II に当てはまる言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 忍耐力 イ 回復力 ウ 破壊力 エ 生命力 オ 包容力

問八 — 線部⑤「ナイルの恵みと、それを大切に生かそうとする人々の努力の賜物だったことは確かでしょう」とありますが、これはどのようなことですか。次の説明文の空欄に当てはまるように30字以上35字以内で説明しなさい。

砂漠に囲まれたエジプトに文明が誕生したのは、のおかげということ。

四 次の文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。

レンガ工場を経営する親方にスリをしようとして失敗した通称^{つうしょう}ドジ吉^{きち}(13歳^{さい})は、「これからは正しく生きろ」と親方がつけた「正吉^{しょうきち}」という名で働き始めるが、そこでも金目の物を持ち逃げする「お目見得盗^{めえどろ}」をしようとかくうらんでいた。そんなある夜、ドジ吉は親方の娘お花^{むすめ}(4歳)と散歩をしていると、工場で働いていたスリの親分「ほくろの安^{やす}」と出くわし、もみ合った末に刃物^{はもの}で刺^さされる。そして、気がつくとき親分宅に寝^ねかされていた。

あれからほくろの安親分はどうしたのだろう。つかまっていたら、ドジ吉の正体をバラしているにちがいない。お目見得盗^{めえどろ}のことも知られたらう。

おなかのきずは痛いけど、あるけないほどではなさそうだ。いまのうちに逃げだそう。

身を起こしかけて、ドキッとした。まくらもとに、だれかすわっている。

——花ちゃん！

すわったまま、いねむりをしている。手ぬぐいをにぎり、こつくり、こつくり船^{ふね}をこいでいる。手ぬぐいで、ドジ吉のひたいのあせをふいてくれているらしい。

——あはやな、あんなこわい目にあつたのに……。

ドジ吉は、ゆつくり身を起こした。花ちゃんの小さな体を、自分がねていたふとんに、痛みをこらえながらそつと横にする。ふつくりした白いほっぺが、ランプの灯^{あか}りで少し赤く見える。

——おおきに、花ちゃん……さいなら。

きびすを返して、たたみの上を静かに歩く。部屋のしきいをまたぎかけたとき、四角い顔がぬうつと現れた。

《注》 1 船をこいでいる——いねむりをして体を前後にゆすっている様子。 2 きびすを返す——引き返す。

「どこへ行く」

「親方！」

「いま動くと、きずによくないぞ」

「お、親方……お世話になりました」

頭をさげて、横をすりぬけようとしたが、親方のごつい手で引きもどされた。ふといまゆが、きゅつとつりあがっている。

「また、スリにもどる気か」

答えられずに、顔をそむけたとたん、平手が、ほおにとんできた。クラツときて、思わず、しきいにひざをつく。

親方が^①仁王さまみたいに立ちほかかる。

「そのしきいから一步でも外へ出てみる。足腰^{あしこし}立たんようにしてやる」

「えっ」

「あの男、北工場^{注3}の納屋^{注4}から抜きとつた五寸釘^{ごすんくぎ}で、看守^{注5}の胸をめつた突^つきに^{注6}して、殺してしもうたさかい、一生、重いくさりの玉をひきずって獄舎^{注6}につなされたままやろ」

「人を殺したんやから……しかたないわ」

「ここから出て、またスリにもどつてみる。おまえも、いつかあの男みたいに、人をあやめるような人間になるぞ。それでも、ええんか！」

ドジ吉は、息をのんだ。

「そ、そんな……」

「人間、悪いことを長いあいだ重ねとつたら、ぬすみも人殺しも、見さかいがのうなってしまうんや」

親方がひざをついて、目の前にすわった。

《注》 3 北工場——ここでは囚人の働いている工場。

5 看守——囚人の見張りをする職員。

4 納屋——物置小屋。
6 獄舎——囚人を入れておく建物。

「正吉、わしかて、人さまの物に手をつけたことがある」

「えっ！」

②「官軍と幕府軍のいくさで、ふた親をなくし、屋台のだんごや、畑の大根なんかをぬすんで生きのびたんや」

「そんなもん、ぬすつとは言えまへん」

「それでも、こわかったぞ。つかまったら、どないしようかと思うて、胸がバクバクしとった。自分はもう、二度とまっとうに生きていけんような気がしてな……」

ドジ吉だつて、こわい。足に重いくさりの玉をつけられる夢に、何度もうなされた。

「けど、おらは、親方とはちがうんや。頭の方から足の先まで、ぬすつとまみれなんや」

「今からでもおそうはない。頭の方から足の先まで、レンガのねんどまみれになれ！」

「むりや……おらにはできひん」

「このひと月、まっとうに働いたやないか。わしのそばで、あとひと月、さらにもうひと月と、少しずつ月日を積み重ねていけば、スリから足があらえる。そのうち必ず、一人前のレンガ職人になれる」

③「け、けど……」

親方のごつい両手が、ドジ吉の肩をつかんでゆする。

「正吉、勇気を出せ。何も清水の舞台からとびおりるとは言わん。どんぶりばちいっぱいの勇気をふりおこしてみろ。いっしょにささえてくれる者が、きつとおる」

それだけ言うと親方は、ポンと肩をたたいて立ち上がった。

《注》 7 官軍と幕府軍——明治政府軍と江戸幕府軍。

《ドジ吉は結局逃げ出さず、そのまま次の日の夕方を迎えた》

昨夜は、もんもんとしてねむれなかった。さされたわき腹がズキズキ痛んだし、親方の言葉も胸にキリキリこたえた。

それでも、いつのまにかねむりの底にひきずりこまれ、まる一日近く寝ていたらしい。

花ちゃんは、まくらもとにいない。たぶん、食堂へ手伝いに行ってるのだろう。そのうち、

「正吉兄ちゃん、起きなさい。ごはんですよ」とか言つて、炊きたてのめしを持ってきてくれるかもしれない。

ドジ吉は、ブルツと首をふった。

——あかん。あまえたら、あかん！

親方や花ちゃんの気持ちはうれしい。でも自分は、それにあまえられる人間ではない。物心ついたときから、人さまの物をかすめとって生きてきたのだ。なのに、人さまのやさしさにあまえてはいけない。

でも、できることなら、まっとうな暮らしをしたい。ただ、自分にそれができるのか、まったく自信がない。

いきなり、ふすまの向こうから、親方のおかみさんの声がした。

「正吉、起きてますか。警察の方がおまえに聞きたいことがあるんやて」

ぎよつとした。思わず、縁側へにげかけたが、すぐにふすまがいた。おかみさんは入ってこず、鼻の下にひげをはやした巡査だけがスツと中へ入りこんできた。ドジ吉は、あわててフトンの横にもどり正座した。

巡査が、腰のサーベルをはずして左横に置きながら、静かにあぐらをかく。

「正吉とやら、殺人犯の脱獄囚をとらえられたのは、おまえの手柄じゃ。礼を言うぞ」

《注》 8 サーベル——西洋風の細身の刀。

おとなにむかつてしゃべるような、重々しい口調だった。巡査には、むかし武士だった人も多いと聞くが、この人もそうかもしれない。「手傷をおうているのに悪いが、いろいろ聞きたいことがあってな、こうしてやつてまいったのじゃ」

——瞬^{いつしゅん}ドジ吉は、目をつむり、それから大きく息をはきだした。

——おらをつかまえに來たのではなかったんや！

すると巡査の目が、まっすぐドジ吉に向けられた。

「うん？　どうかしたかな」

あわてて首を横にふる。

「いえ……べ、べつになんでもありません」

「なるほど、ほっとしたということか？」

「えっ？」

④ 巡査のふといまゆ毛の下で、するどい目が光っている。

「おまえ自身のことを聞かれると思っていたのか……ドジ吉」

顔から血の気がひくのが分かった。いま巡査は、たしかにドジ吉と呼んだ。

——ばれてる！

身をひるがえしてにげだそうとしたとたん、巡査のサーベルが、さやごとんできた。足を思いきり払^{はら}われ、フトンの上にくるがる。

はねおきようとしたら、背中をサーベルでおさえつけられた。もがいたが、身動きできない。サーベルがぎりぎり背中を圧し、まるで大岩が乗っている感じだ。

ドジ吉は、^{注9} 齒^はがみをした。

《注》9 齒^はがみをした——くやしさのため齒を強くかみしめた。

——とうとう、つかまってしもうた！

いつかはこんな日が来ると思っていた。重いくさりの玉を足につけられて、暗い獄舎につながれる日が！

そのとき、ふすまをあけて、親方とおかみさんがとびこんできた。土のこびりついた手ぬぐいを首にかけたまま、親方がどなった。

「けが人に何をしはるんでっか。やめとくなはれ！」

ふりむいた巡査が、「説明しましょう」と、ドジ吉の背中をおさえつけたまま、息も乱さず話し始める。

「この子は、通称ドジ吉といましてな、昨夜とらえられた脱獄囚、ほくろの安の……」

ドジ吉の耳には、巡査が親方に説明する声が、はるか遠くで聞こえていた。

——もう、終わりや……。

全身から、すべての力がぬけていった。

「それは、ぬれぎぬですわ！」

ふいに、親方の野太い声がひびいた。

「正吉は、わしの娘の命の恩人ですねん。それを脱獄囚の子分やったやなんて、あんまりやないですか」

巡査の落ち着いた声が答える。

「いま、こやつがにげだそうとしたのが、動かぬあかし。もはや、言いのがれはできませんな」

「その安とかいうスリが、自分がつかまえられた腹いせに、うそ八百をならべたんとちがいますのか」

巡査が首をかしげた。

「なにゆえ、それほどまでして、この者をかばわれるか？」

すぐに親方の返す言葉はなかった。が、やがて、はつきりとした声がひびいた。

「わしも、こいつと同じみなしごですわ。御一新のどさくさでふた親に死に別れ、必死で生きぬいてきましたんや」
「そうでしたか」

⑤ 巡査が小さくうなずいた。

「御一新は、たくさんの人たちの暮らしをこわしてしまいましたからな……」

「わしは、こいつをどないしてもまっとうなレンガ職人にしてやりたいんですわ」

「ほほう……お目見得盗をたくらんでいたスリの少年を、まっとうな人間に育てたいと言われるのか」

そのとき、あいたままのふすまのそばで、ガシャッと大きな音がした。はっと顔をあげると、花ちゃんだった。手からおぼんが落ち、足元に、湯気をあげているめしや、ジャガイモの煮物^{にもの}などがころがっている。

「ス、スリやて！」

その白いほっぺが赤くそまっている。

ふりむいたおかみさんが、かけよる。

「お花、あっちへ行つてようね」

「いやー！」

花ちゃんは、おかみさんの手をすりぬけると、サーベルでドジ吉をおさえつけている巡査に、体ごとぶつかってきた。

「やめて！ 正吉兄ちゃんをつかまえたら、あかん！」

「お花」

親方がだきとめたが、花ちゃんはさけびつづける。

「正吉兄ちゃんは、おなかが痛い。うちを助けるとき、けがをしたの。はなして！」

《注》10 御一新——明治維新。

⑥ 巡査が、にがわらいしながら、サーベルを持つ手をゆるめた。

ドジ吉は、やっと身を起こしたが、まともにだれの顔も見られず、うなだれて座りこんだ。^{すわ}

するといきなり、花ちゃんがとびついてきた。そのいきおいに、うしろへたおれそうになった。片手について支えたとたん、わき腹がズキッ。

かろうじて小さな体をだきとめる。

「正吉兄ちゃん、うち、いやや。スリは、いやや！」

と声をあげて泣きだした。

しばらくは、花ちゃんの泣き声だけが部屋にひびいた。

やがて親方が、巡査に両手をついた。

「すべての責任はわしが持ちます。何かあったら、首になわをつけてでも警察へ連れて行きます。ここは、むすめにめんじて……どうか

……」

巡査の目に、やわらかい光がやどった。

「負けましたな……。では、親方にお預けします。調書には、人ちがいだつたと記しておきましょう」

巡査は、ドジ吉のほうを向いた。

⑦ 「親方の気持ち、決して無にするでないぞ」

ドジ吉は、言葉もなく、ただ深々と頭をさげた。

巡査が出ていくと、花ちゃんが、ドジ吉の胸から顔をはなした。そのほっぺは、なみだでぐちよぐちよだった。ドジ吉は、花ちゃんのなみだを指でぬぐいながら、あやまった。

「ごめんな、花ちゃん。おらは……ほんまは悪い人間やったんや」

すると花ちゃんが、しゃくりあげながら、言った。

「こんど悪いことしたら、お花が、ゆるしませんからね」

ドジ吉は、小さな体をぐつとだきしめた。

「うん……わかった」

花ちゃんが、おかみさんといっしょに、ちらかったおぼんなどを片つけて、出ていった。

ドジ吉は、親方の前に両手をついた。

「おおきに……ありがとうございます」

ごつつい手がドジ吉の肩に置かれる。

「人間、自分のしでかしたことを消してしまうことはできん。スリをしていたことが、これからも一生、おまえについてまわるやろ」

「へえ……」

⑧「けど、あやまちをおかさずに生きてる者など、この世にひとりもおらん。あやまちをつぐなう勇氣があるかどうかや」

「おら……あやまちをつぐなう勇氣を、花ちゃんから、どんぶりばちに山盛りいっぱいもらったような氣がします」

親方が、わらってポンと肩をたたいた。

「ほな、せいぜいお花のわがままを聞いて、行きたいうちゅうとこがあつたら、どこへでも連れて行つたつてや」

「えっ？」

⑨「職工は交替で休めるけど、わしは休むわけにいかんしな。かみさんはかみさんで、食堂のまかないに大いそがしやろ。お花のわがままをきけるのは、おまえしかおらんのや」

〔注〕 11 職工——工場で働く労働者。

そのとき、ふすまの向こうに足音がして、花ちゃんもどってきた。おぼんをドジ吉の前におくと、ちょこんと横にすわる。

「大きなイカを入れたいしな。よく噛んで食べなあかんえ」

「はい、はい」

「ハイは、いっぺんでいいの」

「はい」

「なあ正吉兄ちゃん、早うケガを治してや。うち、今宮さんのあぶりもちを食べに行きたいねん。弘法さんや天神さんもいっぺん行つてみたいし……そや、祇園祭も行こうな」

親方が太い首をすくめて立ち上がった。

⑩「やれやれ、正吉も、とんだ世話女房をもったもんや」

大またに出ていく親方の背中に、正吉は深々と頭を下げた。

（吉橋通夫「どろん」より。作問の都合上、表現を改めた部分があります。）

※ 本文中から抜き出して答える問題では、句読点や「」などの記号は、字数に数えないものとします。

問一——線部①へ「王さまみたいに立ちはだかる」と対照的な親方の動作が示されている一文を本文中から見つけ、最初の5字を抜き出して答えなさい。

問二——線部②へそんなもん、ぬすつとは言えまへん」とありますが、ドジ吉はどのような人間をへぬすつとだと考えていますか。それを具体的に説明した一文をこの後から見つけ、最初の5字を抜き出して答えなさい。

問三——線部③へけ、けど……とありますが、ドジ吉はなぜためらっているのですか。そのことを説明している連続する二文を見つけ、最初の5字を抜き出して答えなさい。

問四——線部④へ巡査のふといまゆ毛の下で、するどい目が光っている」とありますが、ここで示されている巡査の態度は、この後大きく変化しています。そのことが読み取れる表現を、これより後から一文で見つけ、最初の5字を抜き出して答えなさい。

問五——線部⑤へ御一新は、たくさんの人たちの暮らしをこわしてしまいましたからな……とありますが、へたくさんの人たちには巡査自身も含まれていると思われまふ。彼の暮らしの具体的な変化を推測させる一文を、これより前から見つけ、最初の5字を抜き出して答えなさい。

問六——線部⑥へドジ吉は、やっと身を起こしたが、まともにだれの顔も見られず、うなだれて座りこんだ」とありますが、なぜそのようになつてしまったのですか。その理由として適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 年下の花ちゃんに気をつかせていることがみつともなかったから。

イ 自分の人生をふりかえり、いかに無意味であつたかを思い知ったから。

ウ 巡査に自分の素性を知られた以上、もう逃げられないとあきらめたから。

エ とうとう親方家族にまで自分の素性が知られてしまったと思い、情けなかったから。

オ 親方家族が自分をかばおうとしてくれる姿を見て申しわけなく思ったから。

カ 親方に一人前の職人になると約束したのに、それがかなわないとわかったから。

問七——線部⑦へドジ吉は、言葉もなく、ただ深々と頭をさげたとありますが、言葉もなくとはドジ吉のどのような心境を言い表した表現ですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 身内でもない自分のために、ここまで思ってくれる人と出会えたことに大きく心動かされている。

イ 自分の過去や正体をあばこうとしていた巡査の厳しい態度が突然変わったことにあぜんとしている。

ウ 花ちゃんの必死の願いが、親方と巡査の気持ちをすっかり変えてしまったことにひたすら驚いている。

エ 今までずっと自分が親方家族をだましながら働き、盗みまですりようとしていたことを深く後悔している。

オ レンガ職人として一人前になることを、みんなの前で約束させられてしまったことにひどく動揺している。

問八

——線部⑧へおら……あやまちをつぐなう勇気を、花ちゃんから、どんぶりばちに山盛りいっぱいもらったような気がしますとありますが、このとき「花ちゃん」はドジ吉にとってどんな存在になったと言えますか。本文中からそのことを示す13字の言葉を見つけ、抜き出して答えなさい。

問九

——線部⑨へ大またに出ていく親方の背中に、正吉は深々と頭をさげた」とありますが、どのような気持ちから正吉は「深々と頭をさげた」のですか。「ドジ吉」から「正吉」へと呼び名が変わっていることに注意しつつ、70字以上80字以内で説明しなさい。